

IB DP EE HANDBOOK

SAPPORO KAISEI SECONDARY SCHOOL



このEEハンドブックは、下記の生徒に属しています。

生徒名

目次

生徒と保護者の方へ	1
課題論文(EE)とは	2
学問的誠実性について.....	5
学校の責任	6
指導教員の責任	7
生徒の責任	9
試験官から生徒へのアドバイス.....	10
「課題論文」の研究と執筆へのプロセス	11
「課題論文」の形式・体裁.....	16
口頭試問(最後の振り返りのセッション)	18
評価	19
評価規準.....	20
成績評価の説明	25
参考文献.....	27

生徒と保護者の方へ

「課題論文」(EE)は、DPの公式ガイドの以下のように記載されています。

生徒が関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語(日本語の場合は8000字)の論文にまとめます。生徒は、履修しているDP科目から1科目を選んで対象とする研究分野を定め、大学で必要とされる個人研究のリサーチスキルや記述力を身につけます。研究成果は正式な書式に構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的かつ一貫した形式でアイデアや研究結果を伝えます。高いレベルのリサーチスキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が自分自身で選択したトピックに関する研究に自律的に取り組む機会となっています。

MYP校である本校の生徒にとって、EEは、MYPの「パーソナルプロジェクト」の延長線上にあり、「パーソナルプロジェクト」で行った経験が生きてくることは間違いありません。そこで培った経験を効果的に利用して、取り組めることは、MYPから継続してIBのプログラムで学んでいる本校の強みでもあります。

保護者の方へ

「課題論文」(EE)を進めるうえで、ご不明な点があれば、担当の教師にお気軽にお問い合わせください。

「課題論文」(E E)

とは

「課題論文」の要点をまとめると以下のようになります。

ます。

・「課題論文」は、DPを履修するすべての生徒に課される必修要件です。

・IB 資格を取得するには、「D」以上の成績をとらなければなりません。

・「課題論文」の評価は、学校外で実施されるIBによる外部評価です。「知の理論」(TOK)の成績と合計して最高3点がIB資格の最終スコアに加算されます。

・「課題論文」のプロセスは、大学での学業やDP修了後の他の道での成功に向けた準備として役立ちます。

・「課題論文」の科目を選ぶにあたって、生徒は、当該セッションの DP で学習できる科目を検討する必要があります。科目のリストは IB 資料『DP 手順ハンドブック』に記載されています。

・「課題論文」は、学校内の指導教員の協力のもと、生徒が自分自身で選んだトピックについて行う独自の研究・調査です。

・「課題論文」の科目は、IB資料『DP手順ハンドブック』に記載されたDPの認定科目一覧から選択します。

・「課題論文」は、正式な学術研究として、4000 語(日本語の場合は 8000 字)以内にまとめ、500 語(日本語の場合は1000字)以内の「計画および進捗についての振り返りフォームを(RPPF)」を添えます。

・生徒は約 40 時間かけて「課題論文」に取り組みます。

・生徒をサポートするための指導のプロセスは、3~5 時間が推奨されます。これには必須の振り返りのセッション3回が含まれます。

・最後となる3回目の必須の振り返りセッションは口頭試問で、指導教員による結びの面接です。

既習事項

「課題論文」は、DPのすべての生徒にとって、またとない特別な課題です。生徒はDPで学習している科目で研究を行って、この課題を終えるのに十分な科目知識があることを確認することが、強く推奨されます。

「課題論文」(EE)

とは

生徒が研究方法に精通していれば有利ですが、「課題論文」に取りかかる際のプロセスのひとつが、選んだ科目でその研究領域にとって最も適切な方法論を理解することです。この理解を発達させるには、指導教員、およびDPそして／または「課題論文」のコーディネーター、さらに図書館司書の支援と指導を受ける必要があるでしょう。

生徒は、リサーチスキル、批判的思考、自己管理など応用可能な重要なスキルを発達させ、これを学術的な論文の形式で表現します。重視されるのは、研究過程での「取り組み」と「振り返り」です。これは、知的なレベルと個人的なレベルで生徒がどのような経過をたどったかを示すとともに、その経過が学習者としての生徒にどのような変化をもたらしたか、最終的な論文にどのように影響したかを示すためです。

「課題論文」と「IBの学習者像」

「課題論文」の研究と執筆を通じて行われる学習は、「IBの学習者像」で示されている人物像の特徴の多くを育成することと密接に関連しています。生徒は自分の研究に対して責任をもち、深い知識と理解を身につけるとともにそれらを論文を通じて伝えていきます。研究のプロセスにおいては知的リスクを負うこと、徹底的な熟考を行うことが求められます。心を開くことのほか、バランスのとれた考え方や公正さが、優れた「課題論文」を作成するにあたって必要となります。

「課題論文」(E E)

とは

「知の理論」(TOK)との関連性

「課題論文」はどの科目からトピックを選択したかにかかわらず、証拠を解釈し、評価して、論理的な議論を構築するという点で「知の理論」(TOK)と共通しています。しかし、「課題論文」では、研究プロセスと研究成果はそれほど重要視されていません。

国際的側面

「課題論文」では、科目によっては、研究課題そのものに複数の文化がまたがる課題が内包されています。他の科目でも国際的な側面を持つアプローチをとることが奨励されます。どの科目を選んだ場合においても、「課題論文」に取り組む生徒は多種多様な情報源から適切な情報を探し出すことが求められます。

「学問的誠実性」

について

「学問的誠実性」との関連性

「課題論文」を作成するにあたり、学校で定めている「論文・レポート作成ガイド」に従って取り組むことになります。そこで最も重要なことは学問的誠実性を順守することです。特に、剽窃や盗用という不正行為については十分に注意を払う必要があります。意図的でない行為であっても学問的誠実性に違反する行為として認められる場合は、学問的誠実性の方針に従って、特別指導の対象となります。課題論文の作成過程においては、「論文・レポート作成ガイド」と「学問的誠実性の方針」をしっかりと読んでおきましょう。

「学問的誠実性」に違反する行為があった場合

「課題論文」において「学問的誠実性」に違反する行為があった場合、「学問的誠実性の方針」に従って調査・報告が学校と IB との連携において実行されます。その結果、不正行為が認められた場合は、IB が定める「学問的誠実性」に従って処分が決定されます。

例えば、剽窃行為が判明した場合はディプロマ授与がされないなどの厳しい処分が下されます。

学校の責任

学校は、以下を行うことが求められます。

- ・「課題論文」が本資料で定められた規定に沿うように指導教員向けの研修の機会を設定すること
- ・生徒向けのオリエンテーションの機会を設定し、「課題論文」のアプローチの仕方について説明すること
- ・生徒がトピックを決める際、必ず「課題論文」で取り扱う科目として認定されたDP科目一覧から科目を選ぶようにすること
- ・適格な指導教員(学校内の教師)が必ず各生徒につくようにすること
- ・本資料に記載されている全科目共通と科目別の詳細、およびガイドラインを指導教員と生徒に提供すること
- ・指導教員にそれぞれの科目の最近の年度の「課題論文報告書」(extended essay report)を提供すること
- ・指導教員がIB資料『学問的誠実性』に精通しているようにすること
- ・DPの全体的な文脈における「課題論文」の重要性を生徒に説明すること
- ・「課題論文」には、教員による指導助言や授業時間以外に、生徒が自分で研究や論文作成に約 40 時間かかる必要があることを生徒に説明すること
- ・「課題論文」に必要なリサーチスキルを生徒があらかじめ身につけているようにすること

校内提出期限とIBへの提出期限

「課題論文」に取り組むにあたって、学校と指導教員が論文作成の各段階に期限を設けて生徒に提示します。また、学校と指導教員はこれらの期限を設定すると同時に、IB への最終的な提出期限についても生徒に明示します。

指導教員の責任

指導教員は、以下を行うことが求められます。

・受け持っている生徒それぞれと、必須の振り返りのセッションを3回行います。

・生徒が「計画および進捗についての振り返りフォーム(RPPF)」に記入した振り返りすべてに署名と日付を入れ、このプロセスの終了時にコメントを記入します。

・研究に取り組むためのスキルについて、アドバイスと指導を提供します。

・「課題論文」の研究・執筆過程を通じて、生徒を励まし、サポートします。

・生徒一人ひとりとトピックの選択について話し合い、登録した科目にふさわしい的を絞った研究課題(リサーチクエスチョン)を形成できるよう支援します。さらに、その研究課題(リサーチクエスチョン)が、健康、安全、秘密保持、人権、動物愛護、環境保全などの面で法的・倫理的基準を満たしていることを確認します。

・「課題論文」の規則と評価規準に精通し、そのコピーを生徒に配布します。

・「課題論文」の進歩の過程をモニターして、指導を提供するとともに、生徒自身が取り組んだ論文であることを確認します(論文の一部を提出して指導教員がコメントをつけるなどのことが含まれるかもしれません)。

・「課題論文」の草稿は1回だけ読んでコメントします(草稿を編集してはなりません)。これは、中間の振り返りのセッションの後、かつ最終の振り返りのセッションである口頭試問の前に行うべきです。

・最終の振り返りのセッション(口頭試問)の前に論文の最終稿が提出され、その後は変更されないように確認します。

・最終稿を読み、口頭試問と併せて、本当に生徒自身が取り組んだものであることを確認します。

・最近の「課題論文」の科目レポートを読みます。

・生徒1人につき3～5時間を費やします。これには、3回の必須の振り返りのセッションの時間が含まれます。

・「自己の振り返りジャーナル(RRS)」の制作を生徒に奨励します。



指導教員の責任

・振り返りのセッションの明確なスケジュールを策定します。

・当該科目にとって適切な研究課題(リサーチクエスト)が設定されるよう確認します。

・次の点について生徒に助言します。

－適切なリソース(人、図書館、実験室や研究所など)へのアクセス

－研究方法

－引用と参照の方法

生徒の責任

生徒は、以下を行うことが求められます。

- ・ 計画策定のための道具として「自己の振り返りジャーナル(RRS)」を制作します。
- ・ 「自己の振り返りジャーナル(RRS)」を使用して、振り返りのセッションの準備をします。
- ・ 「自己の振り返りジャーナル(RRS)」からの抜粋を指導教員との振り返りのセッションで共有します。
- ・ 最初に科目を選択し、次にトピックを選んでから、論文に使用する研究課題(リサーチクエスト)を慎重に検討します。
- ・ 論文のトピックと研究課題(リサーチクエスト)を最終決定する前に、論文に使用する資料や文献をどこでどのように見つけるかについて計画を立てます。
- ・ 「課題論文」の研究と執筆の両段階に対してスケジュールを立て、遅れや不測の問題が生じる場合に備えて余分の時間も組み込みます。
- ・ 研究がすべて終わってから使用した文献のリストを改めてつくろうとするのではなく、研究を進めながら文献を記録していきます。これには、「自己の振り返りジャーナル(RRS)」を使用します。
- ・ 指導と振り返りのセッションに臨む際は、自分の成果について議論する準備をしてから臨むことで、セッションを最大限に活用します。
- ・ 論文を書き始める前に、明確な構成を立てます。
- ・ 論文の最終稿を読み直し、校正します。
- ・ 評価に提出する論文の最終稿にすべての文献が正しく一貫して参照されていることを確認します。
- ・ すべての要件を満たしたことを確認します。

試験官から

生徒へのアドバイス

生徒に心がけてほしいこと

- ・自分が興味をもっていて、かつ自分の理解、創造性、独創性を向上させ発揮することのできる科目を選択し、次にトピックを選ぶ。
- ・「自己の振り返りジャーナル(RRS)」を制作して、計画策定と振り返りのセッションの準備に役立てる。
- ・指導教員との時間を最大限に活用して、プロセスのガイダンスとして役立てる。
- ・初回、中間、最終の振り返りのセッションに臨む前に十分に準備する。
- ・学校が設定する締切をすべて守る。
- ・作業を進めながら、参考文献のリストをつくる。
- ・関連する方針について熟知する。

「課題論文」の研究と 執筆へのプロセス

「課題論文」の研究

生徒は、以下のステップに従って「課題論文」の研究を進めるべきです。

1. 当該セッションで学習することのできるDPの科目のなかから「課題論文」に使用する科目を1つ選択します（選択できる科目について、学校が独自に制約を課す場合があります）。
2. 次のIB資料を読みます。本資料に記載された評価規準と科目ごとのセクション、IBの倫理ガイドラインと他の関連ポリシー（動物実験についてのポリシーなど）
3. 自己の振り返りジャーナル（RRS）を準備して、「課題論文」の過程を進めるための計画策定と振り返りの道具として使用します。
4. トピックを選び、そのトピックの文献をいくつか読んで背景情報を理解します。
5. 暫定的に研究課題（リサーチクエスト）を設定します。研究課題（リサーチクエスト）では、できればIBの指示用語を使うようにします。
6. 研究と執筆の過程の大まかな計画を立てます。これには時間的な目安も入れるべきです。
7. どこで、どのように、この研究のための情報を収集するかを特定し始めます。
8. 出典の示し方について、どの書式を採用するかを決め、その形式がIBの最低要件を満たしていることを確認します。
9. 学校が指定した内部的な締切を考慮に入れながら、自分にとって現実的な締切を設定します。
10. 論文の構成を考えます。これは研究を進めるにつれ、変わっていくかもしれませんが、最初からある程度の方向性をもっておくことは有益です。
11. 提案した研究課題（リサーチクエスト）にとって適切な文献を読み、知識を深め始めます。与えられた時間内に必要な根拠を集められないと生徒が感じた場合は、研究課題（リサーチクエスト）を変更すべきです。これは早い段階で行うべきです。事がいづれ良い方向に転じるかもしれないと期待して、時期を遅らせるべきではありません。生徒は、このステップの3、2、または1に戻って、自分の研究を通じて答えることのできる研究課題（リサーチクエスト）を新しく考えます。
12. 研究を進めます。収集した情報は、論文の構成に結びつけながら論理的な順序に組み立てます。また、提起した研究課題（リサーチクエスト）に明確に焦点をあてる必要があります。この作業を行うことで、論理

「課題論文」の研究と 執筆へのプロセス

の各段階に十分な根拠があるかどうか分かり、次の段階へ進めるのが適切かどうかを判断できるようになります。思いどおりにいかない場合もあることを、生徒は理解しなければなりません。時には、すでに確立したと思っていた論理を覆す何かが研究の後のほうの段階になって見つかることもあります。このようなことが生じた場合は、研究の計画を改める必要があります。

研究課題(リサーチクエスト)の設定

・生徒は、必ず研究課題(リサーチクエスト)を質問文の形式で設定しなければなりません。仮説や意図の表明文の形式は認められません。

・研究課題(リサーチクエスト)とは、研究トピックを中心とした明確かつ的を絞った質問です。

研究課題(リサーチクエスト)を設定するための5つのステップは次の通りです。

1. 興味のある科目とトピックを選ぶ

生徒は、自分が関心を寄せていて、個人的に情熱を抱いている科目とトピックを選ぶことは、この過程を通じて意欲を維持するうえで重要です。生徒は、幅広い意味で自分が何に興味をもっているか、それはなぜかを特定できるべきです。

2. 文献を読んで予備知識をつける

関心のあるトピックを決めた後、生徒は、そのトピックについての全般的な文献を読んでもらうべきです。その際に、次のような質問を問いかけます。

- ・このトピックについて、どのようなことが今までに書かれてきたか。
- ・文献や情報を見つけるのは簡単だったか。
- ・幅広く異なる文献が存在しているか。
- ・このトピックについて幅広い見方や見解が存在しているか。
- ・この下調べを通じて、どのような興味深い質問が浮上り始めたか。

3. 浮上り始めた質問を考察する

このトピック全般に関係する、「はい」や「いいえ」で単純に答えられないオープンエンドの質問を考え始めます。通常、この質問は、「どのように」、「なぜ」、「どの程度」といった言葉で問われます。

「課題論文」の研究と
執筆へのプロセス

4. 質問を評価する

論文で使える可能性のある研究課題(リサーチクエスト)を考えたら、それを評価すべきです。この評価は、その質問が明確か、的を絞ったものになっているか、立論が可能かどうかという視点から行います。

明確か:この質問を読んだ人は、私の研究の性質を理解するだろうか。これから始める研究に方向性をもたらすだろうか。

的を絞ったものになっているか:この質問は、課題の範囲内で(語数や時間の制約のなかで)十分に探究できるだけの具体性をもっているか。

立論が可能か:この質問は、分析や評価、論理的な議論の構築が可能か。どこで、どのようにして資料を収集するか。

5. 研究の結果について考察する

研究課題(リサーチクエスト)を暫定的に設定した後、生徒は、この研究がどのような方向へ向かうかを考え始めるべきです。具体的には、次のようなことをします。

- ・考えられる研究の結果を提示する。
- ・どのような議論が構築できるか、研究がその議論をどのように裏付け、発展させられるかについて、骨子を考える。
- ・議論を裏付けるのに十分な研究ができなかった場合の選択肢について考えておく。

【研究課題(リサーチクエスト)の重要な注意点】

不明確で広すぎる質問を立てると、その問題や出来事の概要を説明するだけに終始して、論文で分析や論理的な議論を展開する余地がほとんど残されなくなってしまいます。この結果、試験官は、さまざまな評価規準の項目で、評点をつけることができなくなります。特に、規準C(批判的思考)の評価が難しくなるでしょう。

「課題論文」の研究と 執筆へのプロセス

「課題論文」の執筆

「課題論文」に必ず含めなければならない6つの要素

1. 表紙
2. 目次
3. 序論
4. 本論
5. 結論
6. 参考文献と参考文献目録

表紙

表紙には、以下の情報のみを掲載します。

- ・論文のタイトル
- ・研究課題(リサーチクエスト)
- ・論文の登録科目(「言語」の場合は、カテゴリーも記載すること)
- ・語数(字数)

【重要な注意点】

生徒名と学校名を表紙やページのヘッダーに記載してはなりません。これは、成果物を匿名で評価できるようにするためです。

タイトル

論文のタイトルは、明確かつ的を絞った文言で、かつ研究内容を総括するような文言にします。そのタイトルを読んだ読者に、研究トピックを示すようなものであるべきです。研究課題(リサーチクエスト)をタイトルにしてはなりません。

目次

「課題論文」の最初に目次ページを入れ、すべてのページにページ番号を振らなければなりません。

序論

序論では、この論文から読者が何を期待できるかを伝えます。論文の焦点、研究の範囲、特に使用する文献、およびどのような議論が展開されるかについての洞察を、読者に対して明確にすべきです。

「課題論文」の研究と 執筆へのプロセス

本論(研究、分析、議論、評価)

主となる課題は本論を書くことであり、これは論理的な議論の形式で提示されなければなりません。その形式は、論文の科目によってさまざまですが、議論が展開するにつれ、以下のことが読者にとって明らかになるべきです。

- ・どのような重要な証拠が発見されたか
- ・それがどこでどのように発見されたか
- ・議論をどのように支えるか

例えば「理科」のような科目では、本論のなかに小見出しを入れることで、読者にとって議論が理解しやすくなるでしょう(生徒自身も、議論の展開を把握しやすくなります)。生徒は、「課題論文」の構成を考える際に、論文を登録した科目で一般的に期待されている形式を考慮に入れる必要があります。

本論を書き上げた後で、序論を最終的に確定させ(読者が期待すべきことを伝えます)、また結論を仕上げることができます(何が達成されたかを述べると同時に、この研究の限界やこの研究を通じて解決されなかった疑問を説明します)。

【重要な注意点】

議論を構築するうえで重要な情報は、付録や脚注に入れては**なりません**。試験官は注釈と付録は**読まない**ため、それ自体で完結していない論文は、複数の評価規準にわたって不利を招きます。

結論

結論は、何が達成されたかを述べる部分です。また、研究に限界がある場合や、研究を通じて解決されずに残された疑問がある場合は、それらも結論に含めます。自分の発見したことに基づいて論文全体を通じて結論を導いていくことはありますが、その場合も、最後に最終的かつ総括的な結論があることは重要です。この結論は(複数の場合はすべて)、提起した研究課題(リサーチクエスチョン)に関連づけられていなければなりません。

参考文献と参考文献目録

生徒は、執筆を始めると同時に、自分で選んだ出典の示し方の書式を使い始めなければなりません。これについて詳しくは、IB資料(英語版)『*Effective citing and referencing*(効果的な引用と参照)』を参照してください。

「課題論文」の

形式・体裁

形式

「課題論文」は、明確に、正しく、かつ学術的なスタイル(文体)で書き、選んだ科目にとって適切でなければなりません。以下の書式に従うことが**義務づけられています**。

- ・読みやすいフォントを使用すること(12ポイントを推奨)
- ・ダブルスペースにすること
- ・ページ番号をつけること
- ・生徒名と学校名を表紙やページのヘッダーに入れないこと

語数

「課題論文」は 4000 語(日本語の場合は 8000 字)以内で書きます。

注:試験官は、この制限語数を超えた時点で読むのをやめ、それ以降の部分は評価しないよう指示されます。つまり、4000 語(8000 字)以上の論文は、全ての評価規準で自ら評点を下げることになります。

語数に含まれるもの: 序論、本論、結論、引用箇所、参考文献ではない脚注・文末脚注

図解資料

形式と全体的な美しさは重要です。そして、図解資料を使用するのであれば、よく整理され、効果的に使われていることが、きわめて重要です。グラフ、図式、表、地図は、明確にラベルづけされていて、簡単に解釈できなければ、効果がありません。なお、コメントをつけることはできません。

表

表の使用は、慎重に考慮すべきです。表を使うことは、一部の科目においてのみ真に適切です。語数を減らすために表を使用すべきではありません。

脚注・文末脚注

脚注と文末脚注は、文献の参照を示す目的で使うことができます。その場合は、論文の語数には数えられません。参照ではない情報を脚注や文末脚注に記載する場合は、語数に**数えなければなりません**。

「課題論文」の

形式・体裁

付録

付録は「課題論文」にとって本質的な部分ではないため、試験官は読みません。また、付録に含まれた情報を論文の評価に直接関係する情報はすべて、本論に含む必要があります。

外部へのリソースへの依存

選択する科目にかかわらず、「課題論文」は、学術ジャーナルや研究論文の形式に則った、完全に独立した研究であるべきです。すなわち、ハイパーリンクなどの外部リンクやDVDなどの付属資料にアクセスしなくても、それ自体で読んで理解できる必要があります。

標本資料

調査のなかで使用された、あるいは制作された標本資料は、「課題論文」のいかなる部分も構成しません。このため、これらを**提出してはなりません**。標本資料の代わりとして写真の証拠を提出することはできます。

オンライン文献の参照

オンラインの文献を参照した場合は、使用した抜粋のタイトルのほか、ウェブサイトのアドレス、そのサイトにアクセスした日、そして可能であればその著者を記載すべきです。電子文献に関してIBが義務づけているアクセス日の記載要件は、生徒が選んだ参考文献の形式にかかわらず、必ず守らなければなりません。

文献へのアクセス：eAwareness—電子文献の使用

インターネットで見つかる文献は、確認や編集の過程を経っていない可能性があることに注意しなければなりません。以下のことを確認しましょう。

- ・ 適切な検索エンジンを知っておく。
- ・ インターネットで見つかる無料の情報だけに頼らない。
- ・ 明確で目的を絞った研究課題(リサーチクエスト)を設定して、より直接的な検索をインターネットで行えるようにする
- ・ インターネットで見つかった情報の信頼性と有効性を批判的に評価する。
- ・ アクセスしたサイトとその日時の詳細な記録をつけ、URLを正しく書き留めたかどうか、IBの最低要件を満たしているかどうかを確認する。これには、サイトにアクセスした日付を記録することが含まれます。この記録をつける作業には、「自己の振り返りジャーナル(RRS)」が役立つでしょう。

口頭試問

(最後の振り返りのセッション)

「課題論文」のプロセスを完了するには、生徒と指導教員の間で行う(口頭試問)が必要です。口頭試問を行わないと、「計画および進捗についての振り返りフォーム(RPPF)」が完全に記入されなくなるため、規準E(取り組み)の評価で不利になります。

口頭試問は、生徒が「課題論文」の最終稿をアップロードしてIBの評価用に提出した後で実施します。論文を提出すると、その後は変更ができなくなります。口頭試問は、論文を書き上げたことを称賛する機会であり、同時にこのプロセスから生徒が何を学んだかを振り返る機会でもあります。口頭試問は 20 ～ 30 分程度です。

口頭試問とは、以下のようなものです。

- ・ 「はい」か「いいえ」で単純に答えられないオープンエンドの質問をして、生徒の学習経験についての包括的な証拠を確認する機会
- ・ 論文のアイデアと文献が本当に生徒自身が取り組んだものであることを指導教員が確認する機会
- ・ 研究を通じて達成した成果や直面した困難について振り返る機会
- ・ 「計画および進捗についての振り返りフォーム(RPPF)」に指導教員がコメントできるようになるための機会

「課題論文」の評価は、形成的評価（「計画および進捗についての振り返りフォーム(RPPF)」）と総括的評価（論文）の組み合わせで行われます。

評価規準は、当該科目の解釈と併せて使用しなければなりません。というのは、これらの解釈が特定の科目でどのように理解し、適用するかということが詳細に示されているからです。

評価規準

評価規準は、「正解」か「不正解」のどちらかで採点できないオープンエンドの評価課題に対して使用します。それぞれの規準が、生徒の示すべき特定のスキルに重点を置いています。生徒が何をできるべきかを説明したのが評価目標、どのようにそれをできるべきかを説明したのが評価規準です。

マークバンド(採点基準表)

マークバンド(採点基準表)とは、評価する成果物に期待されるパフォーマンスの全体的な説明です。1つの規準を包括的に示し、それを複数のレベルの説明に分けて示します。

成績評価について

「課題論文」の成績評価は評価 A から評価 E の 5 段階となっています。その段階と、「知の理論」(TOK) の評価 A から評価 E の相関で定められている「最終スコア換算表」に基づいて最高3点までが算出され、生徒に与えられます。

評価規準

規準A: 焦点と方法

この評価規準は、トピック、研究課題(リサーチクエスト)、方法論に注目します。研究の焦点についての説明(トピックと研究課題(リサーチクエスト)が含まれます)、その研究をどのように行うか、さらにその焦点が論文を通じてどのように維持されているかを評価します。

トピックまたは研究課題(リサーチクエスト)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は4点となります。それは以下のような内容です:

- ・「言語 A」不適切なテキスト
- ・「言語 B」不適切なテキストまたは作品
- ・「歴史」10 年ルールに違反している

到達度	指標と要素の説明
0	下記のいずれの水準にも達していない。
1~2	<p>トピックが不明確かつ不完全に述べられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トピックの特定と説明が限定的である。研究の目的と焦点が不明確である、または登録科目における体系的な探究を導かない。 <p>研究課題(リサーチクエスト)が述べられているが、明確に表現されていない、そして／または幅広すぎる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究課題(リサーチクエスト)が、与えられた課題の要件と語数制限に従って効果的に取り扱うには幅広すぎる、または登録科目における体系的な探究を導かない。 ・ 研究課題(リサーチクエスト)の意図は理解されているが、明確に表現されていない、または論文の議論が研究課題(リサーチクエスト)に焦点をあてていない。 <p>研究の方法論が限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 使用した文献そして／または方法論が、トピックと研究課題(リサーチクエスト)にとって限定的である。 ・ 情報に基づいて文献と方法論を選定した証拠が限定的にしか見られない。
3~4	<p>トピックが述べられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究トピックの特定と説明が述べられている。研究の目的と焦点がますます明確にされているが、部分的にのみ適切である。 <p>研究課題(リサーチクエスト)が明確に述べられているが、部分的にのみ焦点があてられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究課題(リサーチクエスト)は明確だが、論文の議論は部分的にのみ、その研究課題(リサーチクエスト)に焦点をあてて結びつけられている。 <p>研究の方法論がほぼ完全である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 使用した文献そして／または方法論が、トピックと研究課題(リサーチクエスト)にとっておおむね関係性があり適切である。 ・ 情報に基づいて文献と方法論を選定した証拠がいくらか見られる。 <p>トピックまたは研究課題(リサーチクエスト)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は4点となります。</p>
5~6	<p>トピックが正確かつ効果的に述べられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究トピックの特定と説明が効果的に述べられている。研究の目的と焦点が明確かつ適切である。 <p>研究課題(リサーチクエスト)が明確に述べられ、焦点があてられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究課題(リサーチクエスト)が明確で、論文の議論に適切に結びつけられた研究の問題を取り上げている。

	<p>研究の方法論が完全である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切な幅のある関連性の高い文献と方法論が、トピックと研究課題(リサーチエスチョン)に関して使用されている。 ・情報に基づいて効果的に文献そして／または方法論を選定した証拠が見られる。
--	---

規準B: 知識と理解

この規準は、研究内容が研究課題(リサーチエスチョン)を探究するために使用した登録科目にどの程度関係しているかを評価します。さらに、知識と理解が適切な用語と概念を使用してどのように示されているかも評価します。

トピックまたは研究課題(リサーチエスチョン)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は4点となります。それは以下のような内容です:

- ・「言語 A」不適切なテキスト
- ・「言語 B」不適切なテキストまたは作品
- ・「歴史」10年ルールに違反している

到達度	レベルの説明
0	<p>下記のいずれの水準にも達していない。</p> <p>知識と理解が限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献資料の選定が、限定的である、または研究課題(リサーチエスチョン)にとって部分的にのみ適切である。 ・トピック／学問領域／問題の知識が、個別事例であり、構造化されておらず、おおむね記述的であって、文献が効果的に使用されていない。 <p>用語と概念の使用が不明確かつ限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目に特有の用語そして／または概念が、欠落しているか、または不正確であり、知識と理解が限定的であることを示している。
1～2	<p>知識と理解が良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献資料の選定が、研究課題(リサーチエスチョン)にとってほとんどの場合に関連性があり、適切である。 ・トピック／学問領域／問題の知識が、明確である。使用した文献の理解が認められるが、その使い方は部分的にのみ効果的である。 <p>用語と概念の使用がまずまずである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目に特有の用語と概念が、ほとんどの場合に正確であり、適切なレベルの知識と理解を示している。 <p>トピックまたは研究課題(リサーチエスチョン)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は4点となります。</p>
3～4	<p>知識と理解が非常に優れている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献資料の選定が、研究課題(リサーチエスチョン)にとって明らかに関連性があり、適切である。 ・トピック／学問領域／問題の知識が、明確で、一貫性があり、文献が理解されたうえで効果的に使用されている。 <p>用語と概念の使用が良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目に特有の用語と概念が、正確かつ一貫して使用されていて、効果的な知識と理解を示している。
5～6	<p>知識と理解が非常に優れている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献資料の選定が、研究課題(リサーチエスチョン)にとって明らかに関連性があり、適切である。 ・トピック／学問領域／問題の知識が、明確で、一貫性があり、文献が理解されたうえで効果的に使用されている。 <p>用語と概念の使用が良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目に特有の用語と概念が、正確かつ一貫して使用されていて、効果的な知識と理解を示している。

規準C: 批判的思考

この規準は、研究の分析と評価に批判的思考スキルがどの程度使われたかを評価します。

トピックまたは研究課題(リサーチクエスト)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は4点となります。それは以下のような内容です:

- ・「言語 A」不適切なテキスト
- ・「言語 B」不適切なテキストまたは作品
- ・「歴史」10年ルールに違反している

到達度	レベルの説明
0	下記のいずれの水準にも達していない。
1~3	<p>研究が限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提示された研究の実践が限定的であり、研究課題(リサーチクエスト)にとっての関連性が明確でない。 <p>分析が限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・限定的な分析が行われている。 ・個別の分析点に対しては結論が導かれているものの、それらは限定的であり、証拠との一貫性がない。 <p>議論/評価が限定的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議論の構築が行われているが、限定的、不完全、記述的、または説明的な性質である。 ・議論の構築が不明確、そして/または構成に一貫性がなく、そのため理解しにくくなっている。 ・最終的な結論は導かれているものの、それらは限定的であり、提示された議論/証拠との一貫性がない。 <p>トピックまたは研究課題(リサーチクエスト)が論文の登録科目にとって不適切と見なされた場合、この規準の最高点は3点となります。</p>
4~6	<p>研究がまずまずの程度である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究のいくつかの実践はまずまずの程度、そして/または研究課題(リサーチクエスト)に関連性のあるものになっている。 <p>分析がまずまずの程度である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分析が行われているが、研究課題(リサーチクエスト)にとって部分的にのみ適切である。関連性のない研究が含まれていて、議論の質を下げている。 ・個別の分析点に対する結論が、証拠によって部分的にのみ支えられている。 <p>議論/評価がまずまずである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議論を構築して研究を説明しているが、その論理には一貫性が欠けている部分が含まれている。 ・議論には明確さが欠け、筋が通らない部分があるかもしれないが、それによって大きく理解が阻害されることはない。 ・最終的または総括的な結論が導かれているものの、提示された議論や証拠との一貫性が部分的である。 ・研究は評価されているが、批判的な評価ではない。
7~9	<p>研究が良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の大半は適切で、その実践は研究課題(リサーチクエスト)にとって明らかに関連性がある。 <p>分析が良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究は、研究課題(リサーチクエスト)にとって明らかに関連性のある方法で分析されている。関連性の低い研究が含まれていても、全体的な分析の質を下げることはほとんどない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別の分析点に対する結論が、証拠によって支えられているが、小さな矛盾がいくらか見られる。 議論／評価が良い。 ・ 効果的に論理で裏づけられた議論が研究から展開されており、結論は提示された証拠で支えられている。 ・ この論理的な議論は、明確に構成されていて一貫性があり、最終的または総括的な結論で支えられている。小さな矛盾が、全体的な議論の力を落としている可能性がある。 ・ 研究は評価されていて、一部は批判的な評価である。
10～12	<ul style="list-style-type: none"> 研究が非常に優れている。 ・ 研究が、研究課題(リサーチエスチョン)にとって適切で、その実践は研究課題(リサーチエスチョン)にとって一貫して関連性がある 分析が非常に優れている。 ・ 研究が、研究課題(リサーチエスチョン)に効果的かつ明確に焦点をあてて分析されている。関連性の低い研究が含まれていても、全体的な分析の質を大きく下げているわけではない。 ・ 個別の分析点に対する結論が、証拠によって効果的に支えられている。 議論／評価が非常に優れている。 ・ 効果的に、かつ的を絞って、論理で裏つけた議論を研究から展開しており、結論は提示された証拠を反映している。 ・ この論理的な議論は、よく構成されていて一貫性がある。一貫性に欠ける部分が少しはあるが、全体的な議論や最終的・総括的な結論の力を落としているわけではない。 ・ 研究が批判的に評価されている。

規準D: 形式

この規準は、学術的な論文に期待される標準的な形式にどの程度従っているか、それにより効果的なコミュニケーションがどの程度高められているかを評価します。

到達度	レベルの説明
0	下記のいずれの水準にも達していない。
1～2	<ul style="list-style-type: none"> 正式な形式が許容範囲である。 ・ 論文の構成が、論文のトピックや議論、および登録科目から期待される通常の技法という点でおおむね適切である。 ・ レイアウト上考慮すべき点はいくらか欠けている、または不正確に使用されている。 ・ 構成および／またはレイアウト上の弱点が、「課題論文」の読みやすさ、理解しやすさ、評価のしやすさに大きく影響していない。
3～4	<ul style="list-style-type: none"> 正式な形式が良い。 ・ 論文の構成が、論文のトピックや議論、および登録科目から期待される通常の技法という点で明らかに適切である。 ・ レイアウト上考慮すべき点が熟考されており、正確に使用されている。 ・ 構成とレイアウトが、「課題論文」の読みやすさ、理解しやすさ、評価のしやすさを支えている。

規準E: 取り組み

この規準は、研究の焦点と研究過程に対して生徒がどのように取り組んだかを評価します。「課題論文」と指導教員のコメントの文脈の中で、「計画および進捗についての振り返りフォーム(RP PF)」に詳述された生徒の振り返りのみに基づき、論文の評価の最後に試験官がこの規準の評価を下します。

到達度	レベルの説明
0	下記のいずれの水準にも達していない。
1～2	取り組みが限定的である。 ・ 意思決定と計画についての振り返りが、おおむね記述的である。 ・ これらの振り返りは、研究の焦点そして／または研究過程に対する限定的なレベルの個人的な取り組みを伝えている。
3～4	取り組みが良い。 ・ 意思決定と計画についての振り返りが分析的で、概念理解とスキルの習得についての言及を含んでいる。 ・ これらの振り返りは、研究の焦点と研究過程に対する中程度のレベルの個人的な取り組みを伝えており、知的活動における主体性をいくらか示している。
5～6	取り組みが非常に優れている。 ・ 意思決定と計画についての振り返りが評価的で、研究過程で直面した困難への反応として行動や考えを検討する生徒の能力についての言及を含んでいる。 ・ これらの振り返りは、研究の焦点と研究過程に対する高度なレベルの知的かつ個人的な取り組みを伝えており、生徒自身が取り組んだ成果物であること、知的活動における主体性をもって取り組んだものであること、そして／または創造的なアプローチが生徒自身の「声」の中に示されている。

成績評価の説明

評価A
<p>選択したトピックの範疇で探究できる、的を絞った、適切な研究課題(リサーチクエスト)を生み出す結果となった効果的な調査スキル、関連性が高い調査領域や手法、また文献への効果的な取り組み、トピックに関する関連性の高い学問領域におけるより広い文脈のなかでの非常に優れた知識と理解、文献資料の効果的な適用および科目特有の専門用語そして／またはそれをさらに支える概念の正確な使用、一貫していて関連性が高く高度に分析された結論、効果的に証拠で支えられた持続的で妥当な論拠;批判的に評価された調査、筋が通っており一貫性のある姿勢によって支えられた非常に優れた論文の形式、明らかに正確な構造的そしてレイアウト的要素の適用を示している。</p> <p>プロセスへの取り組みは概念的そして個人的であり、将来的な事柄に対する考察も含めて、調査の過程における重要な決定は記録され、個人的な振り返りは証拠として残されている。</p>
評価B
<p>選択したトピックの範疇で探究できる、適切な研究課題(リサーチクエスト)を生み出す結果となった適切な調査スキル、関連性が高い調査領域や手法、また文献へのそこそこの効果的な取り組み、トピックに関する関連性の高い学問領域におけるより広い文脈のなかでの良い知識と理解、文献資料の効果的な適用および科目特有の専門用語そして／または概念のそこそこの効果的な使用、適切に分析されている一貫した結論、概ね証拠によって支えられた妥当な論拠、ときに批判的評価を見てとることのできる調査、明らかな構造的そしてレイアウト的要素の適用を示している。</p> <p>プロセスへの取り組みは、調査の過程における振り返りおよび重要な決定の記録によっておおむね証拠として残されている。</p>
評価C
<p>選択したトピックの範疇では必ずしも探究できるとは言い切れない研究課題(リサーチクエスト)を生み出す結果となった調査を行った証拠、ほとんどの部分においては適切な調査領域や手法、また文献への部分的に効果的な取り組み(しかしこれにはプロセスにおける何点かの不一致もあるが、それは計画やアプローチを阻害するほどのものではない)、ほとんどが関連性の高いトピックに関する学問領域における、より広い文脈のなかでのいくらかの知識と理解、文献資料および科目特有の専門用語そして／または概念を適用させようと試みた形跡、部分的に適切な分析を調査に知識統合させようと試みた形跡、弱みもあるがそれが論文全体の阻害になっているというほどではない基準を満たした論文の形式、いくらかの構造的そしてレイアウト的要素の欠かまたは誤用を示している。</p> <p>プロセスへの取り組みは証拠として残されているが、ほぼ事実情報に基づくものであり、個人的な振り返りは手続き的な事柄にほぼ限定されている。</p>
評価D
<p>選択したトピックの範疇で答えることのできない研究課題(リサーチクエスト)と基準を満たしているとは言えない的の絞り方を生み出す結果となった調査の欠如、ときには適切な調査や手法また文献への取り組み(しかしこれにはプロセスにおける不一致があり、たまに計画やアプローチを阻害している)、ときに関連性のないトピックに関する学問領域における、より広い文脈のなかでのいくらかの関連性のある知識と理解、科目特有の専門用語そして／または概念の誤用または少なすぎる使用があるものの文献資料を適用させようと試みた形跡、説明的な議論の結果としての不適切な分析と一貫性のない結論、評価の欠如、ときに非論理的でありそれが論文全体の阻害になっている論文の形式、構造的そしてレイアウト的要素の欠如を示している。</p> <p>プロセスへの取り組みは証拠として残されているが、表面的であり、個人的な振り返りは叙述的なものと手続き的な事柄にとどまっている。</p>

評価E(不合格)

選択したトピックの範疇で答えることのできない研究課題(リサーチクエスチョン)と基準を満たしているとは言えない的の絞り方を生み出す結果となった調査の欠如、ときには適切な調査や手法また文献への取り組み(しかしこれにはプロセスにおける不一致があり、たまに計画やアプローチを阻害している)、ときに関連性のないトピックに関する学問領域における、より広い文脈のなかでのいくらかの関連性のある知識と理解、科目特有の専門用語そして／または概念の誤用または少なすぎる使用があるものの文献資料を適用させようと試みた形跡、説明的な議論の結果としての不適切な分析と一貫性のない結論、評価の欠如、ときに非論理的でありそれが論文全体の障害になっている論文の形式、構造的そしてレイアウト的要素の欠如を示している。

不明瞭な論文の性質、おおむね系統立っていないアプローチとその結果としての的の絞れていない研究課題(リサーチクエスチョン、限定的な調査および文献への限定的な取り組み、関連性の高いトピックに関する学問領域におけるより広い文脈のなかでのおおむね限定的であり部分的にしか正確ではない知識と理解、文献資料の適用における有効でない結びつけ、使用された専門用語そして／または概念の誤用、一貫性のない分析と調査結果の要約、その性質はおおむね説明的であるものの議論の概要を示そうと試みた形跡、ほとんどない、あるいはいくつかの要素を誤用しているだけの構造的要素やレイアウト的要素を示している。

プロセスへの取り組みは限定的であり、限定的な事実に基づくまたは決定に関する情報があり、プロセスに関しての個人的な振り返りはない。

参考文献

「課題論文」(EE)指導の手引き International Baccalaureate Organization, 2017.
Print

「DP:原則から実践へ」 International Baccalaureate Organization, 2014. Print

「DP 手順ハンドブック 2017 年版」International Baccalaureate Organization, 2017.
Print

「学問的誠実性」International Baccalaureate Organization, 2014. Print